

5 種混合予防接種について

病気の説明

（１）ジフテリア

ジフテリア菌の飛沫感染で起こります。現在では国内の患者発生数は年間０が続いていますが、アジア地域では、時折流行的発生がみられています。

感染は主にのどですが、鼻腔内にも感染します。ジフテリアは感染しても 10%程度の人に症状が出るだけで、残りの人は症状が出ない保菌者となり、その人を通じて感染することもあります。症状は高熱、のどの痛み、犬吠様のせき、嘔吐などで、偽膜と呼ばれる膜がのどにできて窒息死することもあります。発病 2～3 週間後には菌の出す毒素によって心筋障害や神経麻痺を起こすことがあるため注意が必要です。

（２）百日せきの症状

百日せき菌の飛沫感染で起こります。

普通のかぜのような症状ではじまります。続いてせきがひどくなり、顔をまっ赤にして連続的にせき込むようになります。せきのあと急に息を吸い込むので、笛を吹くような音が出ます。熱は通常出ません。乳幼児はせきで呼吸ができず、くちびるが青くなったり（チアノーゼ）、けいれんが起きるあるいは突然呼吸がとまってしまうことなどがあります。肺炎や脳症などの重い合併を起こしやすく、新生児や乳児では命を落とすこともあります。

（３）破傷風

破傷風菌はヒトからヒトへと感染するのではなく、土の中などにいる菌が傷口からヒトの体内に入ることによって感染します。菌が体の中で増えると、菌の出す毒素のために、筋肉の強直性けいれんを起こします。最初は口が開かなくなるなどの症状で気付かれ、やがて全身の強直性けいれんを起こすようになり、治療が遅れると死に至ることもある病気です。患者の半数は本人や周りの人では気が付かない程度の軽い刺し傷が原因です。土中に菌がいるため、感染する機会は常にあります。また、妊娠中の母親が抵抗力（免疫）をもっていれば出産時に新生児が破傷風にかかるのを防ぐことができます。

（４）ポリオ

ポリオ（急性灰白髄炎）は「小児まひ」と呼ばれ、我が国でも 1960 年代前半までは大流行を繰り返していました。予防接種の効果により我が国では昭和 55（1980）年を最後に野生株ポリオウイルスによる麻痺患者の発生はなくなり、平成 12（2000）年にはWHOは日本を含む西太平洋地域のポリオ根絶を宣言しましたが、ポリオに対する警戒は依然世界中で続けられています。

口から入ったポリオウイルスは咽頭や小腸の細胞で増殖します。小腸の細胞ではウイルスは 4～35 日間（平均 4～

14 日間）増殖すると言われています。増殖したウイルスは便中に排泄され、再びヒトの口に入り抵抗力（免疫）をもっていないヒトの腸内で増殖し、ヒトからヒトへと感染します。ポリオウイルスに感染しても、ほとんどの場合は症状が出ず、一生抵抗力（終生免疫）が得られます。症状が出る場合、ウイルスの感染が血液を介して脳・脊髄へ広まり、麻痺を起こすことがあります。ポリオウイルスに感染すると 100 人中 5～10 人は、かぜ様の症状があり、発熱を認め、続いて頭痛、嘔吐があらわれます。

また、感染した人の中で、約 1,000～2,000 人に 1 人の割合で手足の麻痺を起こします。一部の人には、その麻痺が永久に残ります。麻痺症状が進行し、呼吸困難により死亡することもあります。

（５）ヒブ

インフルエンザ菌、特に b 型は、中耳炎、副鼻腔炎、気管支炎などの表在性感染症の他、髄膜炎、敗血症、肺炎などの重篤な深部（全身）感染症（侵襲性感染症とも言います。）を起こす、乳幼児にとって問題となる病原細菌です。現在は、Hib ワクチンが普及し、侵襲性 Hib 感染症はほとんどみられなくなりました。

副反応について

4 種混合ワクチンと同様に考えられています。重い副反応はなくても、機嫌が悪くなったり、腫れが目立つときなどは医師に相談してください。

接種時期

	標準接種年齢	接種可能年齢	接種方法
1 期初回	初回接種 生後 2 か月から 12 か月	生後 2 か月以上 7 歳 6 か月未満	20 日以上の間隔をあけて 3 回皮下又は 筋肉内に接種
1 期追加	1 期初回接種 3 回終了後、 12～18 か月	生後 2 か月以上 7 歳 6 か月未満	1 期初回接種 3 回終了後、1 年以上の 間隔をあけて 1 回接種